令和5年門審第29号

裁 決
貨物船A 棧橋衝突事件

受 審 人 a
職 名 A船長
海技免許 二級海技士（航海）

本件について、当海難審判所は、理事官高橋寿則出席のうえ審理し、次のとおり裁決する。

主 文

受審人 a を戒告する。

理 由

（海難の事実）

1 事件発生の年月日時刻及び場所

令和4年6月5日15時22分半僅か過ぎ
福岡県苅田港

2 船舶の要目

船種	船名	貨物船A
総トン数		12,379トン
全長		157.93メートル
機関の種類		ディーゼル機関
出力		5,370キロワット

3 事実の経過

Aは、バウスラスタ2基及びベクツインラダーを備えた船首船橋型鋼製貨物船で、船首端から船橋前面までの距離が約54メートルの船橋内には、中央に操舵スタンドが、その両側にレーダー及び電子海図情報表示装置各1台が、右舷側電子海図情報表示装置右側に機関遠隔操縦装置が備えられ、船橋に接続した両ウイングには、ジョイスティック操船装置、バウスラスタ操作盤及び電子海図システムが設置され、a受審人ほか11人が乗り組み、セメント718トンを積載し、船首4.25メートル船尾6.07メートルの喫水をもって、令和4年6月5日13時40分山口県宇部港を発し、荇田港に向かった。

ところで、荇田港西部には、複数の工場が立地し、各工場前面には専用棧橋が築造されており、Aの着棧予定棧橋（以下「着棧棧橋」という。）の北西方約180メートルの位置に、セメント工場専用棧橋が隣接しており、平素、a受審人は、同棧橋を通過した後、着棧棧橋に平行となり、同棧橋までの距離が80メートルとなる位置からバウスラスタ及びベクツインラダーによる横移動により着棧していた。

a受審人は、三等航海士を補佐に、機関長を機関操作に、甲板員を操舵にそれぞれ当たらせて船橋当直に就き、レーダー、電子海図情報表示装置及び電子海図システムを作動させて周防灘を西行し、14時45分機関用意と同時に入港部署を発令して荇田港域に入った。

a受審人は、15時03分減速を開始し、15時04分少し過ぎ荇田港南防波堤灯台（以下「南防波堤灯台」という。）から016度（真方位、以下同じ。）1,270メートルの地点で荇田港東防波堤灯台（以下「東防波堤灯台」という。）を通過し、船首が248度を向き、8.6ノットの速力（対地速力、以下同じ。）で、手動操舵によって同港内を西行した。

a 受審人は、15時11分僅か過ぎ南防波堤灯台から307度520メートルの地点に至り、船首が177度を向き、3.5ノットの速力で福岡県神ノ島西方沖合を南下し、減速を続けながら着栈栈橋に向かった。

a 受審人は、15時14分半僅か過ぎ南防波堤灯台から270度390メートルの地点に至ったとき、着栈栈橋まで380メートルとなり、東方からの強風を受けると、風下の着栈栈橋に向けて圧流されるおそれがあったが、東風が風速毎秒15メートルには至ることなく著しく圧流されることはないものと思い、着栈栈橋までの距離を風上に十分に確保したうえで接近するなど、風圧流に対する措置を十分にとらなかった。

a 受審人は、15時17分半僅か過ぎ南防波堤灯台から244度440メートルの地点で、船首が162度を向き、1.5ノットの速力で、右舷ウイングで着栈操船を行い着栈栈橋に接近中、風速毎秒約17メートルの東風を受けて風下に落とされるのを認め、セメント工場専用栈橋に向けて圧流され、バウスラスター及びベクツインラダーを用いて左一杯とし、左舷錨を投下したものの、及ばず、15時22分半僅か過ぎ南防波堤灯台から245度530メートルの地点において、Aは、船首が151度を向き、0.4ノットの速力となったとき、その右舷船尾部が同栈橋に衝突した。

当時、天候は雨で風力7の東風が吹き、潮候は下げ潮の中央期で、福岡県苅田町には強風注意報が発表されていた。

衝突の結果、右舷船尾部外板に擦過傷を生じ、セメント工場専用栈橋は、コンクリート部材に割損等を生じたが後に修理された。

(原因及び受審人の行為)

本件棧橋衝突は、荻田港において、荻田町に強風注意報が発表された状況下、着棧棧橋に接近する際、風圧流に対する措置が不十分で、セメント工場専用棧橋に向けて圧流されたことによって発生したものである。

a 受審人は、荻田港において、荻田町に強風注意報が発表された状況下、着棧棧橋に接近する場合、圧流されるおそれがあったのだから、着棧棧橋までの距離を風上に十分に確保したうえで接近するなど、風圧流に対する措置を十分にとるべき注意義務があった。しかるに、a 受審人は、東風が風速毎秒15メートルには至ることなく著しく圧流されることはないものと思い、風圧流に対する措置を十分にとらなかった職務上の過失により、セメント工場専用棧橋に向けて圧流されて同棧橋への衝突を招き、船体、セメント工場専用棧橋に損傷をそれぞれ生じさせるに至った。

以上のa 受審人の行為に対しては、海難審判法第3条の規定により、同法第4条第1項第3号を適用して同人を戒告する。

よって主文のとおり裁決する。

令和6年3月12日

門司地方海難審判所

審判官 山 岸 雅 仁